
がれんど！

ほいみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
がれんど！

【Nコード】
N2421BA

【作者名】
ほいみ

【あらすじ】
特になにも考えず学校生活を送っていた
秋良は級友に誘われカラオケに行くことになった。

「一生懸命はダサい」

これがゆとり教育を9年間受けてきた俺、

竹下秋良が出した結論だ。

こんな結論を出してしまったから

俺は特に本気でやりたいと思えることもなく
人生を無駄にだらだら過ごしてきてしまった。

俺を変えてくれたあいつに出会うまではな。

高校生になったからといって

急にになにかができるようになる訳ではない。

まして自分から何かを始めるなんて

あり得ない。

高校に入ってから俺は毎日そんなことを

考えている。

でも、実際そうだろうか？

入る前はあんなに憧れていた「高校生」も
入ってしまったら中学校とんなら変わらない。

毎日毎日眠気に耐えながらどうでもいい

授業を聞き、気の合う友達と喋り、

同じ方向の友達と家に帰る。

ほら、なんも変わんない。

強いて言えば寄り道をしたりするくらいだろう。

と、俺は空腹がピークに達する

4時間目の授業中にそんなことを考えていた。

入学して1ヶ月、だんだんクラスが

溶け込めてきたある日の4時間目である。

そんなことを考えていたらチャイムがなった。

昼飯を取りだそうと鞆を漁っていると

俺の前に2人の男がやってきた。

「秋良、飯食おうぜ！」

と、元気に言ってきたのは、高校に入って初めてできた友人の赤沢悠斗だ。

「しかしまあやっぱり高校の授業って難しいな。疲れたわ。」

と、真面目なことを言っているこいつは席が近く、最近よくしゃべる東雲翔だ。

悠斗はとても爽やかな男で、

翔は信じられないほどのイケメンなのだ。

この2人に俺みたいなのは取り柄もない

普通の男子高校生が混ざってて大丈夫なんだろうか……

「まあ飯食おうぜ、腹へったわ」
と、俺が言ってみんな食べ始めた。
やっぱりこの時間が一番楽しいな。
気の合う友達と飯を食べる。うん、それだけで
十分だ。

「やっぱり高校入ると帰りに寄り道できるからいいよね」
ほうほう……やはり悠斗もそういうことを
考えていたんだな。

「そうだな。僕も寄り道は好きだな。」
翔もそんなことを言っている。

と、そこで悠斗が「よし！」と言って
宣言した。

「明日学校帰りにカラオケ行こうぜ！
俺女の子も誘ってやるからさ！」
カラオケ……興味はあるけど行ったこと
ないんだよね……どうしょ

「楽しそうだな。僕も行くよ。」
おお、翔も行くのか……

「ん、じゃあ俺も行くわ」
まあこういう付き合いは大事だよな。

「よし、じゃあ色々決めたらメールするな！」
なかなか楽しみな……
友達と寄り道は初めてだし。

そんな感じに雑談をしていたら
昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

うん、明日が楽しみだ。

次の日の放課後さっそく

悠斗、翔とカラオケボックスへと向かった。

「女の子ちゃんと3人誘ったぜ

カラオケで合流ってことになってるから行くこうぜ」

なんか悠斗ノリノリだな……

まあ俺も昨日はちよつと興奮して寝れなかったからな。人のこと言えないか。

その後雑談しながら15分くらい歩いて学校の近くのカラオケボックスに着いた。

「えっと………あ、いた!

おーい!レナ」

悠斗が手を振った方向を見ると同じ学校と思われる女子が3人いた。

「おう!悠斗おせーぞ!」

と、元気に声をかけてきたのは不良っぽい見た目の子だ。

レナ……と、言うのだろうか……

髪の色が赤みがかっていてそれをポニーテールにしている。正直怖い……

「私たちが早く着きすぎちゃっただけでしょ? 文句言わないの。」

そう大人っぽく言った子は
黒髪ロングのストレートヘアを
腰辺りまで伸ばしている。
あと、すごくスタイルがいい……

そして三人目

「カラオケ久しぶりだから楽しみだな」
と、言った子……

俺は天使を見た。

長めの栗色の髪、透き通るように白い肌、
整った顔立ちに綺麗な声。

人間とは思えないほどの可愛さだった。

俺はこの天使のような女の子に
一目惚れをした。

だが、この子が俺の後の人生を
大きく変えていくことになるなんて
予想もしなかった。

カラオケに入り、まずは自己紹介をすることになった。

「どうも！愛沢レナって言います！

悠斗とは家が近くていわゆる幼馴染み？

ってやつかな？まあよろしくね！」

と、さっきのレナという不良っぽい

女子が最初に挨拶をした。

思ったよりも気さくでいい人そうだな。

「はじめまして、天上院瑠璃と言います。

お二人とは学校の席が近く、

仲良くしていただいています。

今日はよろしく願います。」

と、次に黒髪ロングの女の子が挨拶をした。すごい大人っぽいな。

「こんにちは、梅沢小百合って言います。

レナちゃんと瑠璃ちゃんとは

大の仲良しです よろしく願います」

最後に、さっきの天使のような子が挨拶をした。

梅沢さん、っていつのか……

その後悠斗、翔、俺の順に無難に挨拶をし、曲を入れていくことになった。

またもトップバッターで

愛沢さんが女性に人気の歌手の曲を入れ、
続いて悠斗、天上院さん、翔、梅沢さん、
俺の順に曲を入れていった。

愛沢さんは、とても綺麗な歌声で歌い上げた。

次に悠斗が演歌をいれ、妙に上手く歌っていた。

次の天上院さんは洋楽を歌った。

物凄くネイティブな発音で、一発で
英語が得意だと言うことがわかった。

続いて翔の番になり、画面を見ると
アニメの映像が流れた。

あとで聞いてわかったことだが
翔はアニメオタクだったらしい。

あんなにイケメンなのに……

次に梅沢さんが人気アイドルの曲を入れて
可愛く歌った。

PVのどのアイドルよりも可愛かった。

ローテーションの最後に俺は
一番好きなロックバンドの一番好きな曲を
入れた。

今までみんなすごく上手かっただけに
ものすごいプレッシャーだ。

「

」

あゝなんかみんなしらけちゃってるよ……
みんな目丸くしてる……
そんなに下手か……

そして曲が終わった。

「あ、下手な歌でしらせさせちゃって
ごめんな。」

と、言ったら悠斗が珍しく

「なに言ってるんだよ！」と大きい声を出した。

「秋良お前めっちゃ歌上手いじゃん！」

この曲聴いただけでわかるほど

音域広いし表現力も凄いしなにより声量が

人間離れしてる！」

そんなことを言われた。

驚いていると他のみんなも

「お前歌上手いんだな〜！」とか

「正直驚いたな。上手すぎる。」とか

「確かにすごいわね……」「などといわれ、

最後に梅沢さんが

「うん！秋良くんすごいかったよ！」

と、言ってくれた！

俺は半ば放心状態で残りの時間歌い、

いい時間になったので解散することになった。

その日の帰り道はずっと鼻唄を歌っていた。

・3 (後書き)

読んでいただきありがとうございます

冬休みが終わっちゃったので
更新速度落ちるかもですw w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2421ba/>

がれんど！

2012年1月14日00時56分発行